

第112回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2018年12月10日(月) 14時～17時

兼題「数へ日」

川井素山 ○客待ちの車夫も欠伸の小春かな  
一枝に弱日集めて冬薔薇  
数へ日や経よみ妻の位牌拭く  
よしず  
葎簀より昼のおでんの漏るる湯気

保井寶正 ○数へ日の<sup>ひとよ</sup>一夜遺言加筆せり  
朝仏夜は禱りのクリスマス  
柿落葉果実残して美しき  
雪吊の傘よりのぞく寒椿

佐久間喬 ○それぞれの音に顔あり<sup>もがりぶえ</sup>虎落笛  
数へ日や開き直りの断捨離す  
八ヶ岳夕陽とどめて冬至風呂  
数へ日や仕舞湯つかり指を折る

丸山酔宵子 ○雪吊や円錐の先鬚を結ふ  
青みどりつづくひつじ田北國路  
数え日や平成残りあと<sup>ごつき</sup>五月  
焼き鳥やまずボン尻で手酌酒

菊地崇之 ○数え日や妻と我との差は如何に  
枯れ尾花寂声苦味僻み付き  
鴨そばや演奏会の力水  
飲みたしや冷汁なるも雑炊なむ

吉田啓悟 ○顔洗ひさつとひと拭き冬を知る  
おでん鍋人はやつぱり個性だね  
碁石打つ音のひびきや数へ日に

青木英林 ○図書館の静けさ破る咳一つ  
夜更け道<sup>きょうせい</sup>鼻声に身の<sup>すく</sup>竦みたる  
数へ日や居場所迫はれて映画観に  
雨音を子守唄にして山眠る

山本草風 ○妻病みて慣れぬ買物冬ざる  
数へ日いつもと同じ朝迎え  
病室を満月覗く妻の顔  
弔間もせわしく済ます十二月

佐久間たか子○小春日にひと駅歩く線路ぞい  
数へ日の<sup>よわい</sup>齡重ねた書状書き  
冬木立青雲の星せまり来る  
数へ日の万歩計見てにやりする

渡辺鯨波 ○数へ日や丹念に読む訃報欄  
数へ日や絞り出し切る齒磨き粉  
寄せ鍋やわれら無類のハルキスト  
短日の出来損ないのオムライス

原 晶如 ○柔らかに結ぶ手のひら雪婆  
数へ日や母の使ひし津軽塗  
冬の田に着地脱力熱気球  
鰯酒の鰯干してある飲み屋街

後藤克彦 ○鮫鰯や不気味な顔に手鉤穴  
数へ日の子らも少なき砂場かな  
着ぶくれて不様に転び汗流す  
湯ざめして布団布団と重ね寝る

永井正孝 ○数え日ややや足早の繫華街  
蒔蓄に鮫鰯鍋のクラス会  
雪吊りに寒さ身に沁むこの日ごろ  
冬の虫湯殿狭ましと鳴きにけり

金森純女 ○猿山に動くものなし初時雨  
数え日や憂いことなべて遠くなり  
集落を押し流せしや山眠る  
蓮枯るや水面見つめる傘ひとつ

次回「萩句会」

日時 2019年1月14日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『松取れて』一句

当季雑詠 三句